



朝歌日記

外篇
三

45
八遠13
962
3



門 遠 8
第 962
卷 3

朝顔日記卷之二 故芝叟遺話

四回 歌

柳浪著

大内家ハ琳聖大子以来綿々と續きて繁榮比かく武
威ハ山左小ふるひけるが當主大内新介多々良満興殿
の代ハいたしてハ己は數ヶ國ハ押領し室町家の命よ
よして西海道の探題とおもて當家の儒臣ハ駒澤
了菴と喚ぶものあり渠ハ肥後の藩中官城庶助が
兄弟ふり庶助が八男阿蘇松がためハ現在の叔父た
るふりてふも奴たのきて此城下ふ来りやがて駒澤
郎きよたづぬちき始て對面なる自己かく零落たる



縁由ゆゑ明あきら白しろと告つて寄よ托たくたまはると。餘あま義ぎふくたのこ
けまは。叔父おぢ了菴りょうあんもとよる。骨こつ肉にくの因よあるうへ頼たの母ち一ひと死し
人ひとまは。一いつ議ぎももよむず承うけ引ひ。快こころよく款くわん待たいて舎しやらめど
けま。その了菴りょうあん先生せんせいといへる。山陽さんやう山陰さんいんの際さいは技ぎ群ぐんとる
宿しゆく儒にゆもて。博くわく問もん強きやう記きはさらよれいとす。經けい濟さいの渡わた量りやうまた
たぐひぬ。ふも小こよて大おほ内うち殿どのよりも重おも用もちいらまて。政せい
勢せいの商しやう量りやう官くわんも令いけけたる。受う業ぎやうの門もん弟ていども。日ひごしに
門もんは市いちぬか。這こ里りも集つ合ごて。學がく問もんを勵しげけける。さか
ほどは宮城みやぎ阿蘇あそ松まつハ這こ家け小こ寓かく食じきめて。晝ひる夜よ刻せき苦く書しよは
攻こうて判はん耶やも指さたらす。従しゆ来り天てんの縱むせる英えい智ちあるうへ
螢へい雪せつの功こう積せきもて。僅わずかうふ五ごヶ年ねんが間あひだは學がく文もん成せい就じゆしてその
見けん識しきまると卓たく絶ぜつたる。小この叔父おぢの了菴りょうあんたよ手ては拱かうやう
小上こがみ達たちせしとや。歌うたありて證まとねす。

後陽成院

よまぐ人ひと相あひよき。通と芝しののるハ夕ゆふの風かぜもさゆとも
ふの五いつとせのうちの阿蘇あそ松まつ戸とぬ出でずして學がく問もんのよ
日ひぬかうししゆへとせる話わしもねし。おとし十八じゅうはち歳さいはね
アけるその如ごと月のほの初はつ冠かんして。宮城みやぎ阿蘇あそ次つぐ郎らう紀き春はる
雄ゆうと名な乗のりぬ。かく男おとことねる。小こはけけて。青あお雲うんの志しやるうとふ
く。いざひとまづ京きやう鎌かま倉くらよおしひき。仕し官くわんぬかせき見みんと。
機うねて叔父おぢ了菴りょうあん向むかひ。小こ徑かうふと遊あそ學がくのたれ都と會かいへ
のやまたきのぞここべる。當あた分の暇ひまたまはるべしと慥しやう慥しやう
小こ濱はまけま。了菴りょうあん首くびぬらうてまをぬかぬ。都と會かいはよまづ

華麗^{くわい}よて少年^{せうねん}輕薄^{けいぱく}の結交^{けつこう}好^{この}まごころとあろねり。又^{また}こころ
とりしめしめと百般^{さくぱん}賺^ずし。渠^{みち}が望^{のぞ}み拒^こげけり。
了^り菴^{そう}あうせしはふりき宿意^{しゆくい}あるをへねり。了^り菴^{そう}もと一子^{いちし}祥^{しょう}
一^{いつ}つよのあまごも。其^{その}の祥^{しょう}一所^{いしよ}行^{ぎやう}放蕩^{はうたう}まるうへ父^{ちち}の教^{けう}
戒^{かい}なもちあむ。了^り菴^{そう}こまぬ見^みうたてて。遂^{つい}も勘當^{かんたう}ふふい
まの餘^{あま}一男^{いちなん}半女^{はんにょ}もあらねばいと便^{べん}ふくたむいしとら。
不^ふ科^か阿蘇^{あそ}次郎^{じやう}が尋^{たづ}ねきたてし見^みて。その怜悧^{れんげ}きおあ
るに愛^{あい}し。まはか螟蛉^{めいれい}とねり。こが家督^{けとく}を續^つせん。其^{その}時^{とき}
よりまの准備^{じゆんび}あてて。熟渠^{じゆくみち}が舉動^{きゆうどう}ぬ見^みふよろづ小節^{せうせつ}も
拘^かいらぬところある。まつたく志望^{しぼう}の大^{おほ}なるをへなうと猜^そ
せしゆへ。今^{いま}ふまじひよ手放^{てはな}せば。二度^{にど}回^まり来^きるまじと。

おもひをかきて。強^かよひき止めたるねり。事^{こと}よさとしれ宮^{みや}
城^{みやぎ}阿蘇^{あそ}次郎^{じやう}とやくその氣色^{きしき}ぬ見^みてとら。吾^{われ}はどめ國^{くに}を出^{いで}
目^めより。御直^{ごぢ}泰^{たい}からでハ仕^{つか}まじと。大^{おほ}なる志^しぬたてしこの
なり。駒澤^{こまざわ}家^け五百^{いほひやく}石^{いし}の秩祿^{ちやく}望^{のぞ}むところふあらずと。一通^{いつつう}忍^{にん}
留書^{りゅうしょ}ぬのふし。その夜^よも野干^{のくわん}玉^{たま}の間^まよまごまて叔父^{おぢ}
了^り菴^{そう}が家^けぬ志^しのひいで。星夜^{せいや}よこし。ゆれも死^しまや
るぬる。足曳^{あしひき}の山口^{やまぐち}のかとも向^{むか}うのあし見^みるしつ。かいて
日^ひぬ累^{かさね}ねて歩^ある不^ふといつう浪花^{ななはな}の大^{おほ}都^{みやこ}よいた。死^し、
あよべる墨江^{すみゑ}四天王^{しつてんわう}寺^{てら}ふんど。あらくと拜^{かが}ま巡^{めぐ}り。それより
北^{きた}城^{じやう}として長柄^{ながび}川^{がは}なりちまた。山崎^{やまざき}の古^{ふる}街^{まち}道^{みち}ぬ経^へて
西^{にし}嵯峨^{さあが}入^いり。名勝^{なしょう}故路^{こじ}ぬさぶ。不^ふ期^きも名^なよたてる山^{やま}風^{かぜ}

山崎の古街道

三

山の麓よ来て見まば、對面なる群峰の形容濃朱の金
屏風ひきけらぬーかとうたがひき、下ゆく水ハ瑠璃より
も碧ふま、ふねたうふとよ霞あひたる梢ども錦ひひ死
こたせるやうよ、百千株櫻花のこや十二分ハ爛珊て、
山も埋もせて見えぬむか、比しも弥生十日あまて
ねまべ、天色の麗々ぬる小人の心ものびらうふて、物面白
たとまねるうへ、日いとよくととて、川漆の氣色鳥の声も、
あぐちよげか、ふのし死土女雲のごとく出さうて、車
穀撃人肩摩、所せきまでうち集合所くハ、懨うらとへ
てねもみどら圓居しけ、歌よびあり、詩作るあり、また那
方の河原より、下謁めきたるが、いとく酔志まで、謡つ舞つ

隨意ぬごまゝなるひ花ハ餘外ぬる光景なるも、こりし、
さとがよ洛下として、人の打扮の華奢ぬるハ、さらふし、いハ、
世ハ種々よ、己ガ自適るや、ふ、かく風流たるぬ、そびとさ
をへるこそ、優しけとと、獨語て那里、這里と、傍徨や、
て渡月橋、ぬこたま、那方よ、大やうなる堰の、あるぬ、見て、
六の川の、名よ、ねへるをも、さと、ま、つ、水無瀬の懸泉の、あ
た、るぬ、一樹の櫻の中、ハ、勝とて、真白なる、六と、雪、あ
ざ、びくハ、あ、ま、さ、の、中、の、老、樹、か、ま、ま、ま、へ、し、愛、お、や、ん、ど、ま、た、御、方、の
御遊、の、や、相、か、し、小、舟、棹、さ、せ、て、管、絃、を、奏、た、ま、入、け、る、が、其、声、妙
ふ、い、と、いた、う、清、ま、たり、て、謁、た、け、か、る、あ、と、つ、を、わ、ら、ぬ、し、
ふ、り、け、て、竹、の、音、ま、あ、ま、ら、ん、嵐、の、心、の、た、た、ま、こ、く、ま

嵐山の花と
賞して官城
阿護婆即歌
僧月心風流
と談す



安土加保
卷之二

四

と雨三遍うち吟トける。去の時誰といふらど。後方より
袖と捉へて。今吟せらまゝ一ハ足下の詠もる和歌もや
こゝろ、阿蘇次郎つとらう向てみまは見えもへ頭は唐山
巾に戴き。身は褐色の衲衣に穿らう。殊勝の禪僧と
とちる小ぞ。いやしくまく腰折めて正是小的が詠たさ
蜂腰おゝ。那の禪僧うち點頭足下の大姓高名ハ如何
阿蘇次郎應て。小的ハ宮城阿蘇次郎春雄といへる浪人
ふ。那の僧こそは聞て。おはいよきかたらひ人を得たそい
貧道ハ月心として東福寺會下のもの。貧僧も頗この道
は奢とこへる。いざ下居たまへ。霎時ものかたらひてんと。
うちひつとたる盤石の塵うちとらひて。二個相對は空と

占互ハ風月の佳話なかとふ。その好めるおと色々相符。
と取だ趣なましけまば。阿蘇次郎も一知己を得たそと
悦バける。月心いへらく。貧道も去の峨阜の花見人と。昨日
東山より来り遊びて。甲夜ハ臨川寺に宿まう。佳期おける
ことともあまば。今より般舟院にまかして投宿はくうもろ
とも小夜櫻が賞せんはいかど。足下も一同心あり。取はい
ぎ伴ふひゆきふんととむ。阿蘇次郎つとらう。今日ハ何
如なる因縁や。尊者ハ邂逅刺へ同宿と誘ひたそと。
望の外のよろあびふ。自來いそぐ旅よりもあらず。見
たまふびとく。晝間の那のやうの人山人海よて熱鬧トく
と取と俗氣な生ぜり。いうとよ今宵ハ月もあまば。夜

句評 深人静まる小乗て尊者と手分携とへて。月前の花
再賞ししべらん旅の伴侶世の好意とらば陪伴やべしと
うちつをだちてゆく。その夜阿蕪次郎が月心和尚示たる
句詩として世々のこまなり

渡月橋頭人渡月

月明還在緑波間

明とバ宮城阿蕪次郎月心とほまたち嵯峨山瓜たち
出しがけふハ天もごんどろとわかをととちりてあまもよ
とさよぬり。やがて太秦よいたまは月心ハまうこのこ
たす小訪人のあまとして懇よ再會ハ期まで別ハ
ほぐ阿蕪次郎も不とし。一夕の奇遇ハ感トふく
その厚意ハ謝てたちこらまぬ。さてまの阿蕪次郎ハ

のたこしやいかる
ゆは御覽下
くし 駒長
驚時 變改
一落是 春秋
るのハハハ詩
書ロロの書
附ハハハハハ
或ハハハハハ
是ハハハハハ
ハハハハハ

遠の起程

遠の起程よてしりく志き盤纏して支度せど小の
這里よて来る道上よて囊金ハ大らたは費使いたし
つ。とととととる大丈夫ふまの、まとの瓊々たるおとハ
屑どしとせど了け了。阿蕪次郎ハ北野の菅廟よ詣
て、茶店の床ルよやそらひやとら茶錢ハ價ハ人と腰
る財布ハ探見もへいつら売よぬて分半の錢
子とへあらぬハ今宵の房賃ハさらぬ。とへあたる茶錢
成さへこまふたつきなくあぐとて居たをける。但見まバ
對面の繪馬堂ようち仰ぎて立居たる漢子の髪ハ髻リ
まはし手束がうり死すのこして後さよ小反せしハあた
かも慈茄のかたちゆき羊羹色ぬる一つ小袖うち着て

偽八丈長外套をひつ穿ち、ちら短き相口を門よし
 たるさま、いとちる繪馬医者の類、形ら人と北叟笑しが
 渠が這方へふり向たる面ほき、何とやら人熟識のやう
 なり。世よの似たる人もあるらふと、瞳が定めて着る
 うちよ、渠もまゝ阿蘇次郎を見て目なくおたす。一
 霎時痴立てりちましまぬ。那の藪醫者ハ橘雞庵と
 て一条戻橋の邊側よ裏店かきて住居せるものなり。が
 みまより先この雞菴此の瓜葛なたりて、周防の山口
 小下り、國守大内殿の醫官萩野祐安が徒弟とふそ
 こまが玄関番を勤り居りうち、雞庵しとより破落戸
 のまどおまを、いつう祐安が息祐仙がそのか、とら

花街へはちあき、好々蝶蝶よぞ志たてける。まふ小かいて
 雞菴ハ祐仙が愚蠢な欺負多方騙局をまよ。祐仙と
 きて、その父祐安が調度よ。圓金二十兩を竊出させ
 まをね借とるやいふ、その夜山口を逐電して、まの頃
 京都へ回し居たるなり、まの雞菴比先山口ふあましと死
 駒澤許へ入門して、その講譯が聞よ来往せしり。この
 阿蘇次郎しも熟識なり。さて雞菴ハ駈し、阿蘇次郎形
 了と認めしちへ、頗まちりげきりりて、礼なまし。一別以
 来、情な叙またその上洛のちへか問。阿蘇次郎も
 礼な回し、小的たと遠の旅行よて囊中も乏しく、かく
 窶々しくきて、まのこたす小呻吟ぬるよ。かおからさま

わうもあけて今いり小としせんをべねし。いりまてよけんと
と商量なふせば、鶏菴咲面ほくま、その無窮迫ねらん。
とあらばよづ吾廬へ来たまへ幾月までも舎藏ゆふさ
んと。慍慍いさるひける小ぞ。阿蘇次郎ふりく悦び
さあらば多擾よあつうまよをべしとあつく感謝と
かゝぬふのと死俄に天色かきくらしし雨志とふそぼ
ち来、兩個の忙袖笠して、簷づたひよて鶏菴が家よ
たどまほきぬ、鶏菴ふじてかく容易ひさうけ留舎し
ぞねまば、渠しと阿蘇次郎が萬藝に精熟せし事と
よく知る居ゆへふまは香餌よして、榮利が射人との
伎倆なまよそよより官城阿蘇次郎、橘雞菴が慨舎よ

在て渠が勸まよらせ、儒書の講釋ははしつけるよ止
よこま徳孤からず必隣あまよとふぶく。満京の諸生
どし阿蘇次郎の博識が聞傳くことよししと集合ひ
来てその門よ入るもの夥しく。ふまよまて、東脩頗叔
納けるよぞ、鶏菴は古打して獨咲し。その東脩も大半
小掠りよまて、十分計ことを得たまよいと誇りなる顔
貌ねまおほひね一回阿蘇次郎よ出會、その議論と聞
不どの者感服せざるいぬく。個々その大才と賞して喧
まくいひさうよまて、後ふの由ある人さへ門下よ来ま
あそびて、まよし繁昌ねしけまども。鶏菴おのも
のよその利が貪ま。先生よいろくし小、新衣とも穿せ

春之二

九

さるやうをねまは。高弟どももね察して大不平
の色ねねし。そのともがら察し小商議して先生にすわ
下河原まで一堅の乾々浄々せし空房を借け。一切
の家仗までとてまうねひ。日ねトて阿蕪次郎を這
里へ移し。まゝ一個の老實なる蠻僮を買て炊夫とす
さまへ阿蕪次郎。這里へ下帷せしより。門人まをくあつ
ま。衣食豊充てを過活ける。この後まを志むらく話ほ
日月後のごとく。宮城阿蕪次郎。こや二十一歳おぞ成ける。
今年はいうねる機運ふや卯月の初つたよ。鬼直瀬田
の間。螢の出ること夥しく。夕暮ふどふ眼口ふといるばう
と。十や二十に。一搜も握らるふど。いひのゑるよ。浮

やとさ都會の人情。京浪花の人。いふをと見んと。隨意
酒肴道具へて。樓船にさらふ。漁船にさへあつらひて。宇
治橋のとなり。所せきまで棹よして。螢狩とぞ競ひける。
一日下河原の橋居まで。宮城が内子。芦守忠吾。伴
筑八。兩個かねて示しあせし。まよや。阿蕪次郎。向
先生も聞召る。おとく。その夏。宇治の螢影。く出て
その禪裡も格別ねるよし。先生も朝夕御指南のそふ
て。送日たまへ。御精も竭すべし。明ふべ。一日の閑と偷え
試歩あらば。よき破悶ねらん。吾儔も跟随す。てんと
懇又勧めまは。緊温潤ねる阿蕪次郎。渠等が好意を恃
う。ど。その一段有趣べし。容易允諾けまは。兩個ハ不とく

平野の茶店
よて 橋雑巻
阿蘇次郎
高小詰



雀躍していさそたち。炊夫が驅使手小くちとの副刷と
形し。小々やうふる食籠の三段はうりある小。そまをものし
て。ある酒筒がはらるぬんど。いと騒がけまバ。阿菴次
即まをぬ見ていへらく。その行厨ハ頗沉重なる小。猿助ハ
留守と寸小。拿人ハいごめさふくとと人。筑八點頭。明日ハ
面々輪番。看細輪拿小してまいらんとつゝよど。大家関
と笑坪ま入る。誰ははからん。阿菴次郎がぬの螢狩よて。
一個の絶美の風流女と奇遇。許多の説柄がふさんとい。

○五回 螢

けいひ日もいとよく晴て清和なる。風さへうちそよめれて。
かのぼくら交加入の袂もふくらうぬ。官城阿菴次郎ハ

白面青衿。伴筑八芦守忠吾が伴るひ。黎明よて都門と
出て。伏水よいたる。豊後橋がたて。小倉隄をつたひゆくま
の。この風景恰も一幅の西湖の圖が看るがびとくたままバ。
阿菴次郎ハいと興あてて心のどめき。古詩おど吟どけあゆ
行は程もへど。宇治の地方よいとて。まづ黄檗山なる萬福寺
の山門ま入る。伽藍の荘嚴ども總て支那めきてめづらし
そまよて。興聖寺平等院ふんど見巡る。扇の芝の故跡と
たづぬ。やうてまた名たる通圓の茶店よたらし。茶が暖
て湯が志のぎ。又しも宇治橋がたて。橋姫の祠のほとり
小傍徨。經島亀ヶ石ある。彼佐々木忠綱が乗いたる橋
の小嶼が崎ハいつまぞ。捲の島ハあまふらうと。往つ還つ

躑躅は川の面を見とせば。あの時ねと未牌の下一刻
ふもども。こや宵燭狩の催とおがしく。種々の遊舟ども
陸續と掉のふり来て。橋の上下ハ所せきまで。うり集合て
熱開きまといふころ。おは後の世の天満奈小彷彿とら。
阿蘇次郎ハ兩個の門弟と共に。橋の欄干に靠て。ひたをく
目か娛ましめ。心か慰ら居た。そこ。間隔て。川上お
る柳原。まげくたちあたる。時。も緑の蔭かふくめて。いと
冷靜き佳境なる。一艘の樓船か。けがらせて。ぬ。誰ともあ
らぬ火のつく。一琴か。ぞあ。なまらいたる。鶯舌い。
伽陵頻をもねもひやら。その弾音いとい。た。妙よし
て。興趣まといふは。か。阿蘇次郎眉うち。六

古怪や。那舟まで。ひく。琴曲ハ。志らぬ。いと。小。頌歌。お。筑
前の國司太宰少貳殿。秘曲。か。ち。西國。お。と。ら。弾人。ま
ま。あ。の。と。へ。十八段の。迴波。とり。秘操。め。ま。とい。い
け。忠吾。筑ハ。今。お。は。師の。博識。よ。て。音律。ふ
こ。精。き。ふ。と。感。け。る。お。の。時。ま。河の。面。よ。も。那の
琴曲。か。聞。んと。お。や。影の。舟。ども。漕。よ。せて。琴。弾。ふ。お。か
と。ま。死。ける。筑。ハ。あ。の。弾。人。の。藝。ね。らん。か。何。どの。美
声。ハ。都。下。よ。ても。た。や。と。く。聞。得。べ。う。らす。と。ら。ず。が。難。波。女。か
ろ。う。も。あ。ら。ず。阿蘇次郎。い。へ。らく。い。お。く。お。の。彈。音。を。聞
試。る。陰。声。お。了。總。て。女。の。声。ハ。陰。か。もの。ぞ。と。ま。ど。さ。こ
盲。目。ハ。き。い。めて。陰。か。もの。か。り。お。の。声。ハ。ま。つ。ら。ず。た。い。く

ふ女こい女にふもども陰中かげちゆうは陽ひかりは舎やば、やろりやろり両眼りやうがんめさらり
おろおろ未通みとつう女にかるへい噫唱いとうしやうかとのちうりちうりとよいでさらば
ちうちうほきよきて聞きま不ふいと、両個りやうこのものどもと商量しやうりやう橋はし
誥ごねる漁戸いしほはたのとて、一葉いちようの艇ていは借かうけ、直なは打乗うちりやう艀せう
公こうは役やくがせて、那なの柳蔭やなぎかげの樓船りゆうせんのあたへ、掉てうやらしむ艀せう
公こういちこやく掉てうよして、那なの船ふねの真側まがたよふとよせて、擢ひせ
川中せんちゆうよさしとくめ、おのをもいそのま、船端せんたんは挽まとして、臥ふぬ
阿蕪あぶ次郎じやう等らハ割籠わりかご竹筒たけとうまどとて出いし、冷ひやけと酒さけうち
喫興くつきやうはたをけて、濤うげへの曲まがはきく、やがて琴こと弾ひもやと
けとび、集つど合ある船ふねども、随意ずいいよ散ちゆと、や遠とほざかるふつけ
て、あといひつそと静しずまをいへるつ、恰好きやうかく那なの船ふねの障さやひら
けて、裏面うらめんのさよあらは見えぬ、四十しじゆうむらりて女房にようばうの紫むらさ塩しほ瀬せの
袷あはせの上うへ柿地かきぢの小蔓こつるん雲うん鳳ほうの帯おびは志こころらて坐ましたるが、その
膝下ひざごは青春せいしゆん十六七じふろくにんとおぼしき小姐こじやうありて、金糸きんいとのい
た繡刺しゆいせる緋紋ひもん縮緬しゆくめんの襲うしろして、烏金くろがね天鵝てんが絨じゆうの帯おびは纏まとひ
同年どうねんかどの了りやう眾しゆう三個さんごうむらりて、かへづき居ゐまを、その側わきは、
一族いちぞくの奶ちちくみきたる女客にようきやくも、その見みぬ、琴ことハ小姐こじやうの前まへは横よこ
たいに在あるぞ、今いま彈ひびぬといらむろくまをぬ、その
人々ひとびとは香爐かうろは輪流りんりゆうつ、名香なかうは聞居きこゑたる体ていいと高尚かうかうより、
さよハ遠とほく物音ものねのまづまを、しむべりりとまをる、浩然かうぜんよ
不意ふい一陣いちじんの旋風せんぷう吹ふかよきて、忽たちまち地舟ぢふね棚たなよありたる物件ぶつけん
の軽かろきかざり、四方いっぽう八面はつめんおく吹ふちらしたるふ、那なの小姐こじやう

宮城阿蘇改
即兩悔の明
弟とともむ
忠道ちゅうだう
狩かりに赴むかひ



宮城阿蘇改
即兩悔の明



宮城阿蘇改
即兩悔の明

宮城阿蘇改

看るよ。その俊俏の斯文なる眉清目秀美麗玉と欺むき。
一表凡ならず。衣紋のとまり正しく。舉動の溫柔あれども
どまどぬく嚴とせし風趣あり。顔容のけたりきさまい光
源氏と比ぶ。その神氣のいさましくきハ。遮那王丸も
劣るましくぞおほゆ。やがて前のる眾出来。阿蘇次
郎と對て手ぬ突。礼正しくつやう。婢主母のわらうさう
ハ。適間女兒が失いたる。帕子ぬぐとたまハ。アハハハ
ぬき悦びと侍るふ。唐突ぬども謁見とべして礼と
も叙まくねもひいへ。まうけの酒醴もいと荒とてとべれど。
九献まゐらせぬん。おぬたへとせたらせたまへと請どける。
阿蘇次郎うち回答て。まづハ帕子御手入悦ばしくこと

さうらく。まうと御船ぬめとま。美酒賜はるべう。ねもぶ
ろぬる仰もいと感激おもひ侍と。御舟ホハ上落のそ
おハすなる小冠者としてちうげき侍らん。世の憚ぬ
き小もあらざ。よて無礼ぬぐらも同辞やかまことど
叙ける。予眾どもいさうハ。おまぬ聞いまず。多方語ぬ
盡して誘ふひせたむるよ。忠吾筑ハハさきつうとより。つ
美人の隊と見とまていと好ましくおもひかどく。涎と
おとしてあまけるが。おまぬ幸として予眾どもとらとて
ふ。せひとと先生ぬとむむと。予眾どもハまづ人質の
準備よて。忠吾筑ハハやく巴が船へいざかひつ。おほ
まいて。阿蘇次郎が袖袂よとがア。ひととら口説てやま

まず謹慎ふり死阿蘇次郎も今ハ不どくもてあやし
 む。志のしき年がまゝしき侍女のおもふ出来コハ色のがこ
 死石部金吉さまよ。ちくる風流の延風流のまをひと
 何うにくるかるべきいごといひつて手成とつてわつておく
 ひき入る小ぞろ衆どもハさらかす忠吾筑八まで是成
 扶け袖成ひき腰成推ふどして無難舟の中よいざぬ
 ひけり引入る阿蘇次郎ハ當下かの船の中央よ堅と上
 まづ東道負ぬる女房ハ礼成かしてその好意成謝し
 おハてまた堅並又寒温を叙けるかの女房ハここ暮
 春景たもどもそづくまきそのさま咲後もたる牡丹の
 ぶとくふてなとしも餘香成失おはずそまわり小姐と

ねがひ死ハ世ハ冠絶たる標致よて正しく沈魚落鴈
 の容閉月羞花の粧ありかの小姐暗地斜秋波かよはまに
 阿蘇次郎もおもはずおつと四目齊視けをバ小姐ハ情兮
 笑眉けくす袖かき掩宛轉ハ天津乙女の人間よ下
 てあそぶよやあるはまゝ龍宮の乙姫ガ海底より出て
 慰さむりとぞおもぐちる筑八忠吾ハまを成見て不どく
 上有頂天ものつてこへ志はしをぐらぬかかの女房は
 帽子の礼成のべおはて見たまふぶとくこらこら船ハ郎
 たちとてもおんいと興おく侍をよよくもしたらせ
 まひしとやとら盃とをあげて村醪の酔は足ず野花の
 趣き成ふさずとまうせども一樹のうげ一河のながさも

他生の縁といまうとぞやうらぬくおぼしめてこそしりせ
と。阿菴次郎もさしりしとて、阿菴次郎もよろおひまたおぼ
はうらざるお款待も遇へばるとふりく感激なれぬぞれ
どおほうめくきたたいめんかまはかたふうちとけたる
けいひもぬくけいの空の晴和ぬるさまふど演てや風流
たるふとはし不ころぶやく小女房とのいとや郭公と聞召れ
はらんといふ。阿菴次郎いらへて、まの夜ころは、まろろけ侍を
まうど我をいこころへハふつよ来啼ぬよやさりのひまよ
ハおとつも侍をけんおはけりぬく侍るきのへある人の
岩倉よまかきて、初音は聞得しといひやこそつふど清
談をまより敬盃酬盃いと小ざハしとさむかアオ人と

佳人と一對なれして奇遇ハ正よふま錦の
上よ花なそゆるとつべういもさう盛事おそし
ふの光景は見るものどもあるハ羨も。あるハ執妬して
あたりの船より亡頼ものとおぼしく百般罵しをあひて戯
弄よどかの女房侍女は吟付て、左右の舟窓は扇せつかく
て觸も志をしめぐを来て、志をらくとぬしもとたむをバ
阿菴次郎ハ些の着酒力、そのうへかくたてふめし船の
裏比ハ四月の天氣ぬる。何となく蒸々と炎氣けふ
ちえぬよげかく側なる扇子とて、三四分としいらぬ
一望よあるさせたまへと會おなふし襟のあたるとうら
めんぎ。やとら下よおろんとし、おもハずおおそふく

ひらと見えは一首の歌は寫しけたるがまづ筆のすこ
びよのほねねらすをぢがあら。

梅は成おひる歳のたえまよまはきて白く書れたま

阿蘇次郎ハ認める忠吾が扇ふるふぞ渠が方よ背向ひ
よ足下のしらたまひ扇子ぬるう。歌のさま優し
ささらふて墨痕のうらひにたことつづるもはし何寺
の人の寫とよやそのぬいひと問けまは筑八應
へて。その婦人の詠歌ぬる由さるかたより得るべきに志
うめまどその人ハ誰とつふふと成ちりどとつふ阿蘇次
郎眉ぬいとめさもあらば加茂の祐包うさらすばたま
ぬるらん今の世都下よてふをよどの歌よび人の

聴しおよばずとふうく感ぜし面もさらま乳媪ハわどく
絶倒いしてあまそふまどぬる御顔をせうふ。それこそ
とどかたさまの主母の詠たる歌なれといへばかの女房
ハ乳媪ハ叱りてさか洩しそいとつづりたふとつふ阿
蘇次郎襟もと刷ろひ原來上萬の御詠歌ふまらるう。
いべ稜群たる風趣あまけるよとふうく感まかへてぞと
ころり。那の女房しよとららふさまふもてかせどと
よさつかたより。琴といひ香といひふとよ今の和歌ぬ
ごの風流とる態の趣向あろふぞ。まをがたりよ三個の漢
子ハ全然よ蹴壓を興ハ婦人のうたよ奪ハまおのしく
差流たるあまさまぬる。負し精神の伴の筑八味へ

かねてや。巴よのが扇あふ子のさ。蟬せみ眼めのうたがひうふささふふし。
那うの女房おんなむらうの前まへよさし。いだし。ふの扇面あふめんハ。ふもぬる我わが
師しよつ。その詠えい詞しが書かて給たまぬと。賣う弄りぬ。阿あ蕪わ次じ郎らう
ハ。ふも見て。不ふどし。手て小こ両りやう把ばの汗あせが。ふぎつ。つ。女房
とやくかの扇あふが。いたが。ひらき。とて。あとい。

よ。れんれんの月つきハ。ふら。かた。と。思おもへ。く。ぬ。と。神かみつ。ふ。
と。走は筆ふでぬる。墨すみ痕あとの。り。は。く。し。さ。内うちが。から。飛ひ花はな落らく葉えつの
おとく。ふ。ま。ううの女房おんなむらう。數かず回かい吟ぎんぜ。し。う。へ。ふ。な。さ。け。ふ。た
御ご詠えいし。て。ち。う。こ。ろ。の。秀しゆ逸いつと。こ。を。た。も。ひ。侍さむらいと。い。よ。し
その人ひと品しんも。慕こへ。る。と。ま。よ。し。て。賞しょうし。け。る。阿あ蕪わ次じ郎らうハ。又
と。も。前まへの。歌うたが。な。り。て。あ。つ。と。語ことハ。價あひか。と。ね。で。つ。や。う。

適あて問もん彈ひたまへる。箏そうの。琴ことハ。た。し。う。よ。筑つく紫むらぬる。松まつ浦うら檢けん
技わざが。操とらたる。志こころら。ぬ。火ひと。つ。調てう子しハ。て。筑つく前まへの。守まも殿どのの
秘ひ曲きよくが。ま。し。う。け。た。ま。い。て。た。鶯あんな舌したも。い。と。嫩なや々やい。と。
ぶ。り。侍さむらいら。ひ。に。ま。い。極きまめて。令い姐あねの。御おん爪つま音ねと。こ。を。知し
ま。こ。へ。る。か。く。る。秘ひ曲きよくが。志こころる。人ひとの。都みやこが。と。ふ。あ。る。べ。う。と。
お。ほ。え。侍さむらいら。ず。と。ま。ば。い。う。ぬ。る。上かみ瀉しゃハ。ま。よ。し。は。ま。ら。る
や。ら。ん。さ。ま。ま。か。し。色いろま。ぶ。あ。う。さ。せ。た。ま。へ。し。し。女房おんなむらうら
ち。聞きて。コ。ハ。お。た。だ。ぬ。ま。あ。い。侍さむらいま。て。い。と。く。ち。が。ハ。し。く。あ
そ。い。へ。と。ま。し。く。ハ。い。ふ。ふ。か。い。な。き。もの。春はる旗はたま。る。ぬ
で。う。あ。う。ら。さ。ま。ふ。ほ。げ。ま。あ。ら。と。べ。き。ま。う。こ。こ。を。お。り。も
さ。う。ら。ハ。ぬ。た。の。た。ま。し。郎らう君きみと。そ。由よしあ。ま。げ。ぬ。る。御おんけ

旋風旗と
おしと才子
在入と遇ふ



己安丸九代
卷之三

十一

とひ。とくく御名なかのらせたまへ。阿蘇次郎いへらく
 小的ハ西國がこの浪士も。もとまき下従のうへふれば。
 いうでおまがましくも名のまらばき。さああまこと性じ
 て。律の調子な好まざる。今の御礼音の有趣ことを
 をやらど。聞からく太宰の家よ。菊の葉とよの秘曲も待はし。
 不知火を弾せとまふへいよも菊の葉と知りぬるは有じ。
 今日ハ不思議の幸あまて。遇故卿の音ぶりを承り。一入興深くおほ
 えとべまぬ。かゝふけとど。よれつめでよ。あまは菊の
 志とらともあやどりて聞せたまへと。いとせちふのぞと
 ける。うの女房うふづとて。コハハも志ろし。ゆとま
 ね。その唄ハ女児もよく記得とべま。やよ深雪かむら

